

「だれかに反対されても成し遂げたいことありますか」

その言葉が会場の人たちの心を超える。NHKの看板番組「プロジェクトX」のディレクター、無名のヒーローを追っかけてきた山岸秀樹氏の言葉だ。

会場を見渡すと、中大生ばかりではなく、働き盛りの40代の人もいれば、50、60代の人もいる。「プロジェクトX」の視聴者をそのまま反映しているようだ。

白門祭3日目の目玉の講演会。

「プロジェクトX」講演会 情熱、命かけて!!

演会。これまで同番組内で氏は5本の作品を手がけている。だいたい1本あたりの制作に3カ月ほどかかるという。その間は1日たりとも休みなし、だそうだ。

成功者の共通点の1つに「情熱をもっている」というのがある。

山岸氏はソニーを例に、「日本を再建したい」という気持ちで始めた21人足らずの小さな会社が世界に確固たる地位を築いた、理想に燃える男たちの気概や情熱を語った。

この講演会を企画した法学部2年の大槻剛裕さんはプロジェクトXを選んだ理由についてこう話した。

「プロジェクトXは応援歌的な部分があつて人間の中に共鳴できる部分があるんじゃないかなつて。本気でやる気になるということが今の学生に足りないものだと思うんです」

講演会を見た法学部1年の富樫薫さんは「山岸氏は思ったより若かつた。NHKの中にもおもしろそうな雰囲気

に満足顔。」「命をかけて、という言葉は今の時代、恥ずかしいことのように思ふけれど、そういうものを見つけることが大切なんじゃないかなと思ひます」

こう山岸氏は締めくくつた。情熱、気概、理想……僕らも口に失くなって久しい。「命をかけて」何かやつてますか？

(龍)



例のA〇ータさんの事件をご存知ですよ

横領による14億円を貢がせた〇〇人妻、しかも事件発覚時にはお金はもう使っちゃつたよくん、あの事件である。

白門祭の3日、その事件を基にした模擬陪審裁判が開かれた。主催は英米法研究会。なかなかの客(?)の入り……。入り口で記者は『第五陪審団』を渡された。何ダロウ、コレ?

開廷! 被告

告人「ラビーナ・アルバ

ザ・ジャッジ!

A〇ータ被告は「無罪」

ラード」が入廷した。つまりA二〇さん役の方だが、「ラビーナ」は横領なんてしそんでもない、線の細い美人だつた。……暖かい目で見守るしかなさそうだが、フィリピン人として設定なのに「本籍地神奈川県・現住所日野市新町」……ン?

起訴状朗読・冒頭陳述・証人尋問

と裁判は予定通り進められた。しかしここからが本番である。日本の裁判ならただ傍聴すればいい

が、ここはアメリカ流の「陪審法廷」。何と私を含めた第一〜第七の陪審団が評議して評決を下さなければならぬ。人生かかってますよお父さん!

記者も、裁判長の「検察官・弁護人の意見はあくまで意見であり、証人とはならない」この言葉を念頭に話を聞いてきた……。のに、結論が出せない。

罪状認否により、横領による金銭をラビーナが受け取つたことは事実で有罪である。し

かし、その金が横領によるものだと彼女が知らなかつたとしたら無罪なのである。証人たちの証言もいちいち理になつていないし、んもう頭パニック。

結局評決は有罪3対無罪4で、「無罪」の判決が下つた。ちなみに私的のいた第五陪審団も無罪の意見だつたのだが、私はどちらかという有罪の意見だつたことは内緒である。……流された? 自分が情けなかつたけれども

(葵)

白門祭を控えた夕暮れ、記者

は本誌編集室から「特命取材」の連絡をうけた。テーマ「白門祭の模擬店を食い倒れろ」……。これは、遠回しに太れということか!? とも思ったがそこは腐っても記者、ど根性で受けてたつたのである!

結果として寒い日だったので、何を食べても美味しかった、が本音である。しかしラーメンが見当たらないのは意外だった。麺類はメジャーだったが、全てが焼き系であった。そんななか気合が入っていたのは肉系、ニクである。

「トリ乱してすみません」

「教育が焼く一億の鳥、鳥山敏子

先生もびっくり」

「破廉チキン」「チキン野郎」

……男性が野太い声を張り上げて売っていた「コラーゲンたっぷり」豚汁などなど。やはり今年はキン肉マンII世放映中のおおもりもあるのだろうか? 肉の気合が違っていた(よくな気がする)。

そして「塩焼きそば

二百円・卒論アンケートに協力すれば百円キャットシユバック」など切実さを感じるものがある中、最大のインパクトを放つ店の出現。

『闇だこ』……これはその名の通り、たこ焼きの形をしてはいるが中身がタコとは限らない代物である。中身の一例——枝豆・コンビーフ・桜えび……その他いろいろ。注意事項

項として、「いずれも中身は選べません」。ちよつと待て!

ダイエツト記者の「白門祭」食べある記

大体、中身がタコじゃないなら『闇だこ』ではなく『闇焼き』ではないのか!? それに、「その他いろいろ」って何だ。もしも、お母さんごめんなさい、僕東京で人間やめましたみたいな事態になったらどう責任をとるんだ?! しかし、これは今年のメインイベント候補間違いない。ええ、食べましたとも。入ってましたよ枝豆にウイ



ンナーにうずらの卵、ふやけたベビースターラーメン! そして、一個だ

けにちゃんとタコが入っていたあたりが、彼らの良心なのだろう……。だが、突っ込みどころは『闇だこ』

それ自体には非ず。記者の個人的意見だが、これを「中大野望部 仁義酢姦 豚串が!! うまい」……みないな彼らが売っていたとすれば、な

んら不思議はなかった。しかし、しかああし! (一出店…こだま会)……何があつた合唱サークル!! 自分はあなた方の後期募集のピラ見かけましたよ? 12月に定期演奏会があるんじゃないんですか?

これを私に食べろと言うのか



それも、女性を中心に募集してませんでしたか? 。

ただただ今は、彼らの心意気に感服し、定期演奏会の成功を祈るばかりである。何はともあれ、みなさん白門祭お疲れ様でした! おいしかったです!!

以上、後日本格的にダイエツトを始めた記者がお送りいたしました☆ (兎)

露店ひしめきあう中、ひときわ目立つ人ばかり。看板には「中国餃子館」。おいしそうだ。

素通りの人も珍しそうに店の中をのぞく。それもそのはず、店の中を見ると餃子の皮を作る人あり、餃子の具を作る人あり、具を皮に包む人あり。彼らの店はすべてが手作りだ。「白門祭」に過ぎたる本格派。他にも杏仁豆腐と茶でつけたゆで卵も売っている。

「白門祭」に過ぎたる

「中国餃子館」

文学部3年、張榮(ちようえい)さんは忙しそうに動きまわる。小麦粉に水を混ぜたものをこねて卓球のピンポン玉大にちぎったものを、麵棒を使い薄く伸ばしていく。ポイントは何を入れた中央だけ少し厚くすることだという。麵棒を回す姿は慣れたものだ。横の人と談笑しながら麵棒も見ずにソラで作っている。

「中国では週末に家族といっしょに作り、テレビを見ながら食べるのもしまっても次の日の弁当にするのよ。親と子の愛情の深さはこうい

うところにある。コミュニケーションを図れるでしょ」と張さん。張さんはバイトで寿司もにぎっているらしい。

店の人ばかりはつづき、水餃子を食べている人の顔も上々である。

文学部2年の劉鵬(りゅうほう)さんは日本人について「街中で一人

ギターを弾いている日本人を見て、人の目を気にしないというところに

感動した」という。

そうかなあ、とそういう感じ方にも

感動したけれど。

彼は杏仁豆腐の仕込みを朝の3時までやっていたらしく、48時間まるまる寝てないらしかった。

張さんは「中国の文化をもっと伝えたいという気持ちでこの店を出したんですけど。日本人ともっと交流したい。そのチャンスを作りたい」と話す。

「来年もやりますよー!」。茶目つきたっぷりに張さんは吠えた。

(哲)



多くの中大生は

天気は敏感だ。なぜなら、多摩キャンパスの「王子」の天気はTVや新聞の天気予報には載らない。表示は「東京」と書かれた都心部の天気だけである。ホントの天気を知る術がないわけである。そして、東京のハズレの天気はしばしばハズレる……。

——とある月曜日、法・政2年のK子は1限のテニスの授業を目指して朝も早くに家を出た。外

は台風が来た

都心は「大雨」多摩「快晴」

スフ濡れ残酷日記

かのような大嵐である。体操着などでパンパンのリュックをからげ、ラケットを抱えて雨中を進む姿は、さも勇ましかった。

さてここで疑問なのが、雨なのになぜテニス道具があるのかということである。答えは、中大が「晴れ」だからだ。家を出る前に、大学近辺に住む友人に確認済み。自宅が遠い

K子は、月曜日はこうしてテニス道具があるかどうかの判断をする。

いやしかし……横なぐ

りの雨。全身ずぶ濡れ。駅に着いたときには、色落ちした染料が写って地肌が紺色になるわ、メイクは剥げ落ちるわ、もはやとても「女子大生」じゃなかった。周りを見回してみたが、K子の濡れザマは群を抜いていた。「傘に穴でも開いていたのだから」

生協購入の新品を疑ったくらいである。穴はなかった。

帰ろう!これはもう学校どころではない。いくら中

大が晴れでも、こつちがこんな大嵐なら止むのを待つべきだった。雨はほどほど弱まり、あつという間に家に到着した。

が、鍵がない!あいにく家には誰もいなかった。ならば学校へ行くべきか? K子は迷った。そんなところへ一通のメール。「今日はやつぱりイイ天気☆テニスあるみたいだよ」

大学近辺の友人からだ。K子の顔はひきつった。そして決意をした。やつぱり学校へは行かない!

(Q)

先のサッカーW杯で、フイー

ゴを擁するポルトガルが韓国にあえなく敗退した日、一人泣き濡れて、「あの審判はなんだ!」とひどい荒

れようだったという噂がある。いまにして思うと、彼の地への思いがかくまでにたぎっていたのであろう。

秋には留学するぞ、という大志が。そして彼は、10月はじめ、空路リスボンに向かった。

石畑涼馬君、商学部の4年生。高

校生を案内す

る「キャンパス・ツアー」

コワク的なポルトガル…… リスボン大学で学ぶ

で学生班の「顔」というのか、いつも前掛け姿で……といえば見かけた人も多いだらう。イラスト通りの、あの彼である。

「認定留学」として、

後期からの1年間、国

立リスボン大学の「文

学部」に席を置いて学

ぶ。なんで文学部?

といえば、「向こうに

はそもそも商学部がな

い」んだそうである。

デパートだって、ないらしい。

「音楽のファド、くらいしか知らないなあ」と

一人は言った。大航海時代の帝国も、いまや世界が忘れちゃったよう

な……国。そんなところへ、「なんでまた?」とみんなが言った。「だからこそ」と燃える、「不思議な熱情」

が彼の持ち味なのだった。

セカセカの日本とは「万事逆」と

メールが届いた。10月半ばというのに「昨日あたりか

らリスボンはだいたいクリスマスモードになりました」。君よ、港町リスボンの灯はコワク的に輝いている

(呂)



「あーあ、詐欺に

あっちゃった」と夏の短期留学から帰国したB子がすこししよげている。

「もしかして結婚詐欺?」と身を乗り出す友に、「……私がバカだった」。

友達と西洋の街並みを見て回ろうと、彼女は地下鉄の駅で待ち合わせをした。しかし待てども待ち人來た

らず(電車が遅れたせいだったのだ)。寮に直帰するのもシヤクな

で駅周辺をブラブラしながら写真を撮っている、一人の白人男性が話しか

けてきたんだそうである。

「I'm sorry, but……」。ワタシお

金をすべて盗まれてしまつて、家に帰ることができなくて困っている。警察にも行ったが、家に帰るまでのお金は貸してもらえなかつたウンヌン。

「スグニカエシマス」と言うし、見かねたB子は、約3万円を貸すことにした(親切にもATMでおろして!)。「アリガトウ」と彼は日本語

を使って笑顔で去つたそう。

後は梨の礫、教えてもらった電話も住所もデータラメ、警察にも相談したが、すべては「後の祭り」という、よくある話である。

すっかり者のA子が言った。「今回はお金だけで済んでよかつたと思つて、あきらめなさい。でもおかしな雰囲気なかつたの」

そうなのよね、とB子は打ち明けるのだ。彼は「貸して」だの「ちよー

「詐欺にあっちゃった」 海外留学編

だい」だのいくつかの日本語をしゃべり、あげく某一

流銀行の新宿にあるオフィスは自分がデザインした、とも「吹いた」らしい。

いま考えればそうなのだけれど。

海外でのスリやひつたくり対策の研究はさんざやつたというのに、ワタクシとしたことが……。人間、警戒しすぎると、逆にアカラサマなヤ

ツに注意がいかぬものであるなあ」というのが、お人好しのB子のおおらかな教訓である。

(青)

法学部のKさんはモノレール

の改札では私鉄の定期を入れてしまふ。授業に間に合わない走りこんだ教室は別の部屋。「天然、天然」と友人から笑われている。

そんなKさんのバイトでの話。彼は授業のない日は地元の図書館で働いている。仕事として頼まれているのは本の貸出しと書架整理、それと簡単な来館者の応対。はつきりいつて、こんな楽

『最近のミミズが危ない』……!?

な仕事はほかにない。だが

やはり、彼はここでもそのボケぶりを遺憾なく発揮していた。

ある日Kさんは、小学2年生くらいの小さな女の子に、この本ありますかと、紙切れをわたされた。そこには、

「さいきんのみみずがあぶない」の文字。

「最近のミミズが危ない? なんじゃそりゃ?」

と一瞬思ったが、環境ホルモンでオスがメスになってしまふご時世、ウムそんな問題もあるのかもしれない

い……。妙に納得してコンピュータで検索を始めた。いつもみんなに馬鹿にされている者の悲しさで、相手が正しいと思うのが習慣になっているのだ。

しかし、何度検索をかけても出てこない。他の人にも手伝ってもらって昆虫の棚を見てまわってみても、やはり、ダメ。いつかも小学生につかまっつて『焼肉の歴史』についての本を探したつて

なあ……そんなこともつい思い出してしまう。

でも、ないものは仕方がない。かわいそうだけど、頼んできた女の子に

「危ないミミズ、なんていないよね? もう一回本の名前おしえてくれる?」

とたずねると、キョトンとして女の子は言った。

『最近、飲み水が危ない』

Kさんの頭が、またも

変換ミス、をしてしまっていたのである。

(空)

大玉転がしのボールを夢中で

追いかける。いきおいあまって自分の転がした大玉の下敷きになる子供も。でも、がんばって立ち上がる。泣かずに、屈託のない笑顔を浮かべて……。

障害をもつ人たちの運動会——「青空の下みんなと一緒の運動会」が中大のアリーナで10月7日に行われた。中大近隣の社会福祉法人・日の社会福祉協

障害者の運動会

議会を中心に運営され、こ

として第7回。中大のアリーナを使っての開催は2回目となる。

障害者の参加数は約220人、運営を手伝いするボランティアはその3倍の約600人。そのなかに、中大ボランティアセンターCAVICのメンバーで総合政策学部2年の播

亜希さん＝写真右＝も。

はじめはやや不安げな表情。

「緊張するわ。私、障害者のひとたちと接するのは初めてだから」

そう言いつつも、装飾

の準備、綱引きの応援、勝って喜ぶ障害者の少年と握手……少し照れたように。次第に会場の雰囲気にもなじんで、エプロン姿で駆け回る。白組と赤組に分かれての運動会は最後の最後で白組が逆転というファイナル劇もあつて、たいへんな盛り上がりようだった。表情もやわらかい。

「以前インドネシアに住んでボランティアをやっていたとき大変だったのは言葉が通じ

ないということ。でも言葉が通じな

くてもできることはあるんですよ。最初、障害者のひとたちとどう接していくか分からなくて緊張もしたけど、とても楽しかった」と、笑顔のソーカツ。(龍)



「冒険」というものは、何も

ドラ○エヤF○の中だけのものではない。そう、まさしく『炎の塔』への潜入はわたしにとって冒険だった。

文学部に所属し、モノレールから3号館まで一直線のヌルイ毎日……。たまには自分の学校のウラのウラまで探ってみたくて、「遠い……、場所がわからん……！」とぶつくさ言いながらも、気後れするような塔

への、魔法の力ギでもいるのか!?と思うような木の扉をくぐったのだ。

潜入ルボ!!

「炎の塔」

一歩入ると二オイが「新しい……」。目に映るもの全てが「新しい……」。自販機コーナーになんて、石焼きイモのパンが……いやいやレンジ（新品☆）、水道、極めつけにコンセントが4つ。何というか、ここで生活しろと……!?

こんなところでショックを受けているヒマはない。階段のカベなんて「だ、大理石……みかげ石……！」だし二階には、ほらオープンカフエってあるでしょ？ オープン勉

強スペース併設！ しか

も何かジュータンがあつて、靴脱ぐ所がある！

結局奥にソファアがあつて座つて帰つてきた……だけ。本当は体育館があつたとか!? 誰かプ

リーステルミ☆
あと、はずせないスポーツ、トイレは音姫完備！ ウオッシュレットも標準装備！ 深呼吸できるトイレつても貴重なんだろうな……。ふふふ。

帰り際、『炎の塔』の由来を見てきた。「炎のよう

な学生の情熱か……。何となく、ミーハー心で取材？にきた自分に自己嫌悪を感じつつ、中にいた学生の顔を思い浮かべると……やっぱり何かいい顔してたなあ……。なんかうまく言えないけど。天気の良い日はお外で勉強して、気分転換にステンドグラスをみて……「それもいいのかもなあ……ん!?」。そういえば、ステンド

グラスを見るのを忘れてきた。もったいない……天高く馬肥ゆる一方の秋の午後、である。
(兎)



10月1日。火曜日。

テレビほどの局も刻々の気象情報をベタ流し。戦後最大級といわれる台風

21号が関東直撃の雲行きで、私鉄の一部では朝のうちに夕方の運休を決めるなど、どこも厳戒体勢だった。

午後になり、雨も一段と激しさを増してきた中、ついに、中央大学多摩キャンパスでも午後3時過ぎ、5限以降の講義全てを休講とする、という発表がなされた。風雨

台風21号―火曜休講 燃えるA君の探求心

によって、モノレールの運行が見合わさられる可能性を考えれば当然の措置。しかしこういう時にこそ血が騒ぐというお祭り男がいるんですね。

A君としておこう。普段はクールなのに、雨が激しくなるに従つて、はじめ、風が強くなるにつれて瞳が輝きだした。「モノレールなくなっちゃうよ。さ、帰ろー」とみな帰り急ぐ中で、A君は

「せっかくだからこの状況を満喫しよう」と叫び立った。
「そうだ！（学部棟の）誰もいない教室へ行つて、いろいろな場所から、この台風の様子を感じてみよう」
もう誰も彼を止めることはできなかった。彼の姿は、まさに台風のごとく風を巻いて消えていったのだ。

数日後、A君に「あの日のその後」を聞いたところ、言葉どおり「大学での台風の諸相を十二分に楽しんだ」そうである。
「帰りは、電車的大幅な遅延で大変

だったけどさ」
思えば、台風のこの日も火曜日。火曜日といえば、前期に多摩キャンパスで突然起こった停電もそう、ワールドカップの対ベルギー戦もそう。結果、休講になったのが、なぜか火曜日なのである。

「授業が成り立たないよ」とは「火曜5限」に授業を持つ教授の嘆きだが、学生にとっては思わず知らず、休息がごろりこむ幸運の曜日。「火曜日」に期待！である。
(虹)